病牀雑記

芥川龍之介

一、病中閑（かん）なるを幸ひ、諸雑誌の小説を十五篇ばかり読む。滝井（たきゐ）君の「ゲテモノ」同君の作中にても一頭地（いつとうち）を抜ける出来栄（ば）えなり。親父（おやぢ）にも、倅（せがれ）にも、風景にも、朴（ぼく）にして雅（が）を破らざること、もろこしの餅（もち）の如き味はひありと言ふべし。その手際（てぎは）の鮮（あざや）かなるは恐らくは九月小説中の第一ならん乎（か）。

二、里見（さとみ）君の「蚊遣（かや）り」も亦（また）十月小説中の白眉（はくび）なり。唯聊（いささ）か末段（まつだん）に至つて落筆匆匆（そうそう）の憾（うら）みあらん乎（か）。他は人情的か何か知らねど、不相変巧手（あひかはらずかうしゆ）の名に背（そむ）かずと言ふべし。

三、旅に病めることは珍らしからず。（今度も

軽井沢の寐冷えを持ち越せるなり。）但し最も苦しかりしは丁度支那へ渡らんとせる前、下の関の宿屋に倒れし時ならん。この時も高が風邪なれど、東京、大阪、下の関と三度目のぶり返しなれば、存外熱も容易には下らず、おまけに手足にはピリン疹を生じたれば、女中などは少くとも梅毒患者位には思ひしなるべし。彼等の一人、僕を憐んで曰、「注射でもなすつたら、よろしうございませうに。」

　東雲の煤ふる中や下の関

四、彼は昨日「小咄文学」を罵り、今日恬然として「コント文学」を作る。宜なるかな。彼の健康なるや。

五、小穴隆一(をあなりゆういち)、軽井沢の宿屋にて飯を食ふこと五椀(ごわん)の後(のち)女中の前に小皿を出し、「これに飯を少し」と言へば、佐佐木茂索(ささきもさく)、「まだ食ふ気か」と言ふ。「ううん、手紙の封をするのだ」と言へど、茂索、中中承知せず「あとでそつと食ふ気だらう」と言ふ。隆一、憮然(ぶぜん)として、「ぢや大和糊(やまとのり)にするわ」と言へば、茂索、愈(いよいよ)承知せず、「ははあ、糊(のり)でも舐(な)める気だな。」

六、それから又玉突き場(ば)に遊びゐたるに、一人(ひとり)の年少紳士(しんし)あり。僕等の仲間に入れてくれと言ふ。彼の僕等に対するや、未(いま)だ嘗(かつて)「ます」と言ふ語尾を使はず、「そら、そこを厚く中(あ)てるんだ」などと命令すること

屢（しばしば）なり。然れどもワン・ピイスを一着したる佐佐木夫人に対するや、慇懃（いんぎん）に礼を施して曰（いはく）、「あなたはソオシアル・ダンスをおやりですか？」佐佐木夫人の良人（をつと）即ち佐佐木茂索、「あいつは一体何ものかね」と言へば、何度も玉に負けたる隆一、言下（ごんか）に正体を道破して曰（いはく）、「小金（こがね）をためた玉ボオイだらう。」

七、軽井沢（かるゐざは）に芭蕉（ばせを）の句碑（くひ）あり。「馬をさへながむる雪のあしたかな」の句を刻す。これは甲子吟行（かつしぎんかう）中の句なれば、名古屋あたりの作なるべし。それを何ゆゑに刻したるにや。因（ちなみ）に言ふ、追分（おひわけ）には「吹き飛ばす石は浅間（あさま）の野分（のわき）かな」の句碑あるよし。

八、軽井沢の或骨董屋（こつとうや）の英語、――「ジス・キリノ（桐の）・ボックス・イズ・ベリイ・ナイス。」

九、室生犀星（むろふさいせい）、碓氷（うすひ）山上よりつらなる妙義（めうぎ）の崔嵬（さいくわい）たるを望んで曰（いはく）、「妙義山（めいぎさん）と言ふ山は生姜（しやうが）に似てゐるね。」

十、十項だけ書かんと思ひしも熱出でてペンを続けること能（あた）はず。

（大正十四年十月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

す。